



## 羅針盤

根本 治

Osamu Nemoto

廣仁会札幌皮膚科クリニック 院長  
Visual Dermatology 編集協力者



## クリニックにおけるレーザー治療

当初、レーザー治療は主に形成外科領域で開始され、皮膚科医はその使用に消極的であった。観血的治療は外科に任せることとし、レーザーを用いた治療は皮膚の組織学を研鑽している皮膚科医が行うべきものであったと思う。現在は大学病院、基幹病院をはじめクリニックにもレーザーを導入する皮膚科が増加していることは、患者のQOLを向上させるという意味で、喜ばしいことと考える。

レーザー治療というと、第一番目の選択になる疾患は母斑ということになり、小児を中心に長期にわたる治療経過を追うことになる。先駆者からの助言はまさに「金」であり、いろいろと辛酸をなめながら治療技術がついていく。レーザー治療後どうなるのか、次の患者受診まで気になってしかたない心配を味わったことは何度もある。全身麻酔を行うレベルの病変については、クリニックでの治療範囲を超えるが、局所外用麻酔で施行できる病変については、フレキシブルな時間の活用ができるクリニックの得意とするところである。

次にレーザーの恩恵を受けるものとして、これまでの皮膚科診療における治療で行き詰まったときに、レーザー治療で突破口を見出した経験が何度もある。レーザーがあることで治療の幅が著しく増大し、一般診療における一治療としてのレーザーの役割を強く認識している。ルビーレーザーやアレキサンドライトレーザー、そして色素レーザーも大いに役立つが、CO<sub>2</sub>ガスレーザー

は皮膚科外来に不可欠といってもよいほど使用頻度が多い。連続照射による焼灼だけでなく、パルス療法は瘢痕を残さずに隆起病変を平坦化させ、顔面の小病変に多用している。

私の住む北海道は、すべての診療科についていえることであるが、地域によって医療の格差が生じてしまいがちである。皮膚科においても湿疹皮膚炎や蕁麻疹、白癬などに代表されるような薬物療法により治療できる疾患はよいが、白斑、脱毛症、紫外線療法の適応疾患などについては地域格差が生じてしまう。今、話題の乾癬に対する生物学的製剤ですら、導入後は自己注射を含め地域格差なしに治療できる状況なのに、レーザー治療の適応疾患については、その機器がないために治療ができない地域が生じてしまうというジレンマがある。今後、各地にレーザー機器が普及するようになってほしいものである。

レーザー治療を行っていることを標榜すると、「しみ」をはじめとする美容的な相談が増えるのも事実である。美容を扱うことを好まない皮膚科医もいると思うが、皮膚を治すことが美容的にも改善していることは多く、皮膚に関するいろいろな相談に応じることができ、適切なアドバイスができることは皮膚科医の大事な役目と考える。

今回の特集では、一般外来を行っている二つのクリニックにおいて、美容皮膚科という観点ではなく、皮膚科日常診療におけるレーザー治療の意義を考え、その実際について述べたい。